



めじかじ通信

航海-84

めじかじ市民記者ネットワーク

市民記者の目から見た「こもろ」を発信していくページです。ちょっとへんてこりんな名前「めじかじ」。意味は「め=目」と「じ=耳」を使って、発見への「かじ=舵」をとろう。どうぞ期待！
またガッツのある取材記者を募集します。

▼問い合わせ先 企画課 情報戦略推進係

今年是小諸で「全国風穴サミット」

氷風穴の里保存会会長 前田富孝さん（64歳） 氷

前田富孝さんは忙しい。四足のわらじを履いている。一足目は小諸市役所職員―退職後も嘱託で勤めている。二足目は氷風の区長―市の区長会副会長も務めている。三足目は氷風穴の里保存会会長―保存会は昨年二月に設立されたばかりで、会員は氷風の戸数とほぼ同じ34人。四足目は花卉栽培農家―菊を作っていて、出荷調整のために風穴を利用して

風穴とは、ガレ場（山崩れで崖になった、石塊のガラガラした急斜面）の岩層のすき間が地表に開いた穴のこと。これらの穴を通して空気が地下の岩のすき間を上下に対流している地帯を「風穴地帯」という。夏季に斜面上部から入った空気が冷やされながら下って、斜面下部から吹き出す「冷風穴」に小屋をかけた「風穴小屋」のことを一



般に「風穴」と呼んでいる。以上の仕組みは、区民のための「風穴学習会」で学んだ。氷区には数基の風穴跡のほか、今も穀物や漬物、野菜や果物、清酒の貯蔵に使用する風穴が一基ある。この貴重な一基は区民の土屋節（たかし）さん宅が長年手入れをしてきた。北海道から鹿児島まで三百基も確認できるうち「これほど初期の状態を保っているのは数少ない」と専門家に言われている。氷地区に風穴が発見されたのは元禄年間で、貯蔵しておいた水を夏に取り出し、当時の藩主に献上していた記録がある。製水販売業は昭和四十年代まで続いた。明治初期には「風穴業」が最盛期を迎え、蚕種（蚕の卵）を預かって貯蔵し孵化の時期を調整して、生糸の増産に貢献した。今年九月第一週の週末二日間に市民交流センターで「第四回全国風穴サミット in 小諸」（仮称）が開かれる。これまで三回の会議では、観光や野外学習・自然エネルギーとしての利用法などが話し合われてきた。風穴保存会会長として前田さんは、早くに風穴に注目してくれた県建築士会佐久支部のメンバーや、郷土史研究家と協力して会期を



風穴群の中にある氷神様のほこら

乗り切るつもりでいる。サミットに向けて「保存会をどのようにしたら面白い活動ができると思いますか？何がしたいですか？」氷区民に記名アンケートをとってみた。様々な意見があつて「今は模索状態」という。星空が美しい、全区民百人足らずの氷地区長は近隣への小旅行を計画した。風穴を利用したダツタンそば貯蔵庫見学とそばの昼食会という。「風穴への意識を高めたい」保存会の前田さんは考えている。風穴跡を補修することも計画中だ。

前田さんは小諸市役所入庁前の八年間、海上自衛隊航空部隊航空整備士だった。エンジン整備最終確認のための搭乗時間は百時間ほど。最後の二年間は教官を務めた。当時の教え子が東日本大震災の災害現場で活躍してくれてうれしかった。「家族ふるさと、国を大切に思う気持ち」は市役所職員としても同じ」と背筋を伸ばして言う。

（取材・文 佐藤 万千子）

ゆらさんの四季の薬膳 みかんの楽しみ方

お正月にのんびりコタツで手に取るくだものといえば、みかんですね。外国では「サツマ」という名前が人気の温州みかんは、約5百年前鹿児島県で生まれた純国産品。薬膳では肺を潤し、のどの渴きを癒し、からだに必要な体液を生み出すだけでなく、気を巡らせる働きがあります。そのため、食欲がないときや、熱による咳、風邪などにみかんは効果を発揮します。また、みかんの皮に含まれるβ-クリプトキサンチンには、発がん抑制効果があるとも。

β-クリプトキサンチンはみかんのオレンジ色に入っているカロテノイドの一種で、みかんの皮に多く含まれています。漢方薬では陳皮（ちんぴ）と呼ばれ、体内に滞った気をめぐらし、嘔吐や下痢、消化不良、痰の多いときなどに使います。作り方は、農薬の少ないみかんの皮を適度な太さの千切りにし、日の当たる室内で2日ほど干すと出来上がり。紅茶に浮かべたり、料理に使ってみてください。

（国際中医薬膳師 小清水由良）

